

## 第 16 回女性文化研究特別賞の選考について

上村千賀子氏 『占領期女性のエンパワーメント：メアリ・ビーアド、エセル・ウィード、加藤シヅエ』 藤原書店

### (1) 選考経過および選考結果

第 16 回女性文化研究賞の選考過程で申し述べた通り、最終選考会での協議の結果、今回は女性文化研究賞に加え、特に研究の資料的価値の高さと研究成果の意義を評価し、上村千賀子氏（群馬大学名誉教授）の著書『占領期女性のエンパワーメント：メアリ・ビーアド、エセル・ウィード、加藤シヅエ』（藤原書店、2023 年 3 月 30 日）に「第 16 回昭和女子大学女性文化研究特別賞」を贈呈することに決定した。

### (2) 受賞作の選考理由

本書は、占領下での GHQ の女性政策や女性参政権行使の実態を、GHQ の女性政策責任者エセル・ウィードと女性史研究の先駆者メアリ・ビーアドの間の往復書簡や、加藤シヅエの貢献などに関する未公刊の貴重な史料である書簡やインタビューをもとに丹念に描いた労作である。

特に、ビーアドの日本女性史の刊行と加藤による和訳書の刊行経緯を追う間に、ベアテ・シロタによる日本国憲法 24 条制定草案や、民法改正の過程が示されている件は重要である。1946 年 6 月の帝国議会で当初日本政府が新憲法案の下でも家制度は維持されるとしていたにも関わらず、8 月下旬以降、家制度の廃止が決定されてゆく過程について、GHQ 資料の公開（1988 年）以降、GHQ の関りが注目されつつあったが、本書ほど明瞭に、ウィードなどの政策決定の過程を明らかにした研究は初めてであり、民法改正過程の謎を解いたという点だけをとっても、きわめて貴重な史料であるといえる。

ウィードの「女性参政権は戦前からの婦選運動の賜」というメッセージは、日本女性の下からの運動を勇気づけ、民主化の達成を促した。本書は、占領期の新たな女性政策が日米の女性たちの連帯、協力によってどのように推進されたのか、政策立案と実施のプロセスを解明し、今日の男女共同参画への取組にも勇気と示唆を与えていると言える。家族法の改正が相次ぐなど転換期を迎えている今日、本書が広く読まれ、男女共同参画関係者の連帯と協力、政策の更なる進展に寄与することを強く期待する。